Chapter 5

中国人でなくマレーシア華人であること
馬華文学雑誌に見るアイデンティティの諸相

Being Malaysian Chinese but not Chinese from China: Multifaceted Identities in Malaysian Sinophone Magazine

舛谷 鋭 (MASUTANI Satoshi)

はじめに

現代マレーシア文学の中で、主に華語（中国語）教育を受けた華語系の華人作家によって執筆された一群の作品を馬華文学と言い、今世紀以降は華語語系（サイノフォン；Sinophone）とも呼ばれている。現代アジア文学において、プロ作家と商業文芸誌に支えられた日本のような文学は実は少数派だが、馬華文学にもプロ作家はいない。たとえば1980年代に専業の呼び声高かった丁雲はテレビの脚本で糊口をしのぎ、雅波は自らの書肆で身を立てていた。永楽多斯は明星（アイドル）作家として身の上相談を得意とし、李天葆、瘦子等、現職元職の小中学校教員も少なくない。シンガポールきっての長篇作家、流軍は事業の成功で五十近くなってから執筆に専念できるようになったし、辛口の散文で知られた故英培安は自作の版元でもある草根書室を経営していた。大陸に文学館を持つ尤今や、李憶君等の女性作家たちも家族の協力は無視できないし、梁文福は音楽活動から得る収入の方が多いだろう。初版で3,000部以上を刷り、再版も含め１万部近い売り上げを見込める「出版社が出版したがる作家」にしてこの有り様である。

「文化砂漠」は香港などを含め、海外華人世界で広く聞かれる自嘲表現だが、東南アジアでも都市生活者の華人の生活は、確かにビジネス本位ではあろう。非国語の民族語文学である以上、識字人口には限りがある。マレーシアでは民族、宗教、言語が、シンガポールでは政治が、それぞれ題材の制約として立ちはだかる。原稿料が安い上、日本では当たり前に思える出版社丸抱えの出版はごく稀で、自費か華人社団（会館）などの助成金による出版が多い。

そして最も大きな問題は、発表機会の少なさであろう。華語系の公立小学校や私立中高時代には、教育の一環として華語作文の機会がある。北マレーシアの故陳強華のように、日新中学で教え子の文集を出版している教員もいる。また、学生の投稿の受け皿として、50年代には香港の『中国学生週報』が、70年代には『好学生』が機能していたこともあった。しかし、長じて作品を発表しようとしたとき、どこに投稿したらよいのか。わずかにマレーシアでは『星洲日報』や『南洋商報』、シンガポールでは『聯合早報』など華字紙の別刷り文芸欄（文芸副刊）しかない。この状況は馬華文学発祥以来同じで、華語文学すなわち副刊文学とも言えよう。

本稿では主に、冷戦期80年代までの馬華文学の媒体として、数少ない副刊以外の文芸雑誌に着目し、特に華語系華人文学を通じマレーシア華人のアイデンティティとナショナリティ探求の手かがりとしたい。

マレーシアの文芸雑誌

前述の通り馬華文学は華字紙副刊文学である。各地の文芸サークルではそのときどきに同人誌が発行されていて、北マレーシアの『清流』やクランバレーの『爝火』は細々ながら比較的長く続いたが、他は「三号雑誌」がほとんどだ。唯一の例外が1955年11月にシンガポールで創刊された華語文芸誌『蕉風』（Bulanan Chao Foon）である。

マレーシア、シンガポール域内に読者が限られる状況からして、文芸誌が競合するのは華字紙の文芸副刊であることはすでに述べた。東南アジア華人のエスニック・プレスである華字紙は、早くから会館、華語教育と並ぶ「華僑三宝」として華語系華人社会の

形成存続を支えて来たが、馬華文学においても例外でなく、特にマラヤ独立以前までは、繰り返し述べるように「馬華文学は（華字紙）副刊文学」であった。しかし、60年代以降文芸作品を掲載する雑誌の数も増え、文芸副刊の馬華文学における地位も絶対的なものではなくなってきている。とはいえ単独の文芸誌に限れば『蕉風』以外は短命のものが多く、たとえば姚拓は1986年に分離以前のシンガポール発行のものも含めて21の文芸誌を紹介しているが[1]、その内、近年まで継承されているのはマレーシア写作人協会の機関誌『写作人』（-1994。1995-2006マレーシア華文作家協会『馬華作家』『馬華文学』『馬華文芸』など）くらいで、その他1988年創刊の『拉讓江文学季刊』、1990年創刊の『清流』などはいずれも各地文芸団体の機関誌であり、曲がりなりにも商業ベースに乗っている文芸誌は『蕉風』一誌と言わざるを得ない。こうした中『蕉風』が文芸副刊との対抗上しばしば掲げるのは以下のような主張である。

> 『蕉風』が30数年に渡って続いているのは、『蕉風』には愛読者と『蕉風』を支持する作者が存在するからです。ある作者は『蕉風』である時期執筆したのち、新聞に書き始めますが、これはお金のためでなく（『蕉風』より稿料の高い新聞にはお目にかかったことがありません）[2]、その幅広い読者層のためでしょう。現在『蕉風』の発行部数が新聞と比べて遠く及ばないことは否定すべくもありませんが、以下の二つの事柄を作者は認識しなければなりません。第一に新聞を買う人が必ずしも副刊を読むとは限りませんし、副刊を読む人も必ずしも文芸版を読むとは限りません。しかし『蕉風』を買う人は必ずや文芸愛好者に違いありません。第二に『蕉風』を読んでいる各地の著名作家、学者、評論家はや大学教授は多く、これは現地各新聞の及ぶところではありません。『蕉風』に掲載される作品は新聞ほど広くはありませんが、新聞よりも遠く、長く、知音に伝わります。私たちは毎号『蕉風』を海外の著名作家や各地の大図書館に贈呈[3]し、現地作品が海外の注意を引くよう努力しています[4]。

読み捨ての新聞副刊でなく単独の文芸誌として発行されている強みを強調しているわけだが、確かに副刊形式には以下のような限界がある。

①読者層が広いため娯楽性の強いもの優先
②分量の制約
③散逸しやすい

『蕉風』との比較では特に②が重要で、文芸副刊は連載もあるが紙面の都合で編集者に短篇が好まれる。雑誌形式ならそれほど制約も厳しくなく、長さに関係なく中篇なら一挙掲載できる。

『蕉風』は創刊時には何と隔週発行で、三年後からは月刊発行を継続していた。しかし1986年１～４月号の停刊を挟み、1990年１月からは隔月発行となった。これによって作品投稿から掲載まで２～４ヶ月かかるようになり、新聞副刊の場合の投稿後約１週間という掲載スピードに慣れた馬華作家には不評だった。これに対し『蕉風』側は読み捨てでないことを繰り返し強調している。

海外華語媒体で常に問題となる使用字体だが、『蕉風』は当初繁体字で、437期（1990.7-8）から簡体字を採用している。これは国内華語教育が簡体字で行われているため、繁体字のままでは識字できない層が増えたための措置だった。

> マレーシアでは若者達は簡体字を学んでおり、『蕉風』は繁体字を堅持し続ければ『蕉風』を読める者は段々少なくなり、市場も益々狭くなり、この先続けていけなくなるおそれがあります。よって『蕉風』を簡体字に変えて印刷することを繁体字擁護の読者、作者、編者に懇願するものであります。簡体字が美観と正確さにおいて繁体字に及ばないことは認めざるを得ません。しかし簡体字を使っている国の文学水準がそのために衰えているとも思えません。『蕉風』の水準を保つことは必要で、また『蕉風』を売ることも必要なのです。私たちは今号から徐々に簡体字を採用し始めます[5]。

1）姚拓「馬来西亜独立後馬華文学的発展」『蕉風』394期、1986.8（以下巻号のみはすべて『蕉風』より）

2）80年代では新聞が通常千字当り10リンギに対し、『蕉風』は一編15リンギ（短詩は12リンギ）

3）日本をはじめアジアの主要図書館やオレゴン大、アメリカ連邦図書館にも寄贈していたようだが、バックナンバーは姚拓個人分の寄贈を受けたクアラルンプールの華語研究中心集賢図書館↗とジョホールバルの南方大学学院図書館内、馬華文学館、南洋大学図書館の流れを汲むシンガポール国立大学中文図書館が、それぞれ不完全な形で所蔵していた。

4）「編集記」423期、1989.2

5）「編集記」435期、1990.3-4

これまで出版形態を中心に、媒体としての『蕉風』の特徴を述べたが、内容に関わる事柄について紹介しよう。

『蕉風』の最初の主編は、1930年代半ばに中国共産党の指導者であった張国壽の子息の方天（張海威）で、最初の出版人は申青だった。当時マラヤでは独立を目前に華僑作家の間でも愛国（マラヤ）主義的な文学運動が高まっていた。『蕉風』の創刊のことばは次の通りだ。

「文化の砂漠」ということばでマラヤの文化を形容する人がいるが、このことばは妥当でなく、マラヤの文化人にとって明らかな悪口である。しかし落ち着いて考えて見よう。なぜ「文化の砂漠」ということばでマラヤが呼ばれるのか。文化事業が軽視されているせいではなかろうか？　われわれ馬華文化工作者が提起を行なっても文化は主流を占める意見とならない。

過去の歴史が証明しているように、われわれの祖先はマラヤの地にあって物質文明の創造について輝かしい業績をあげているが、精神文明の創造では同様な成果をあげていない。こうした否定できない事実に基づいて、われわれ馬華文化工作者は積極的、主体的に任務を負い、幾本かの貧弱な筆でマラヤの文化の砂漠に文化のオアシスを開こう。

マラヤはわれわれ中華民族が全人口の半分以上を占め、今後長きに渡りわれわれは他のマラヤの民族と協調し、ともに生活して行かねばならない。生きて死すこの地マラヤへの理解が足りなければ、笑い者になるしかない。ある土地について理解したいのなら、ある民族について理解したいなら、歴史や地理の本を読んだり、宣伝文のような本を見たりして済ますことはできない。社会の内部に入り込み、実際に生活に没入してやっと少しずつ見えてくる。また、その土地、その民族の文化を真摯に観察することによって正確な答案が得られる。野にある一木一草、生活の端々、これらすべてが文筆を経ることで眼前にはっきりと現れ、多くを知ることができ、状況を理解し、他の民族との平和共存の最良の方法をも見つけることができるかもしれない。

文化界の友人達と上記のような問題を話し合う度に、共通して感じ一致して思うことは、今日のマラヤに純マラヤ的な文芸雑誌を創刊することが急務だということである。われわれの力はまだ雄大でなく、陣容も強力でないけれど、われわれの誠心誠意が社会の共感を得、多くの文化人が参加し、われわれと共同で開墾に当たるならば、この雑誌の前途は非常に明るいだろう。「蕉風」の二文字は南洋の雰囲気を現わす以外、特に意味もなく、出典を探して記す必要もない。われわれはただ、この蕉風が秋風や夜雨のエレジーを奏でるのでなく、マラヤの大地を吹き抜け、勢いの盛んな文化の新芽を慈しみ育ててくれることを望んでいる[6]。

『蕉風』は創刊後しばらくは香港でも読まれていた。後述のように中国大陸から香港経由でマラヤに渡った黄崖が編集をつとめたり、香港や台湾から徐速、劉以鬯、白先勇、余光中らの有力な作家の作品を掲載していたからである[7]。1970年代には現代シンガポールを代表する芸術家、陳瑞獻も『蕉風』の編集をつとめている。

1965年以前はマレーシアと一体であったシンガポールの華語文芸だが、現在ではマレーシアの華人作家は意外とシンガポールと疎遠な場合が多い。その点『蕉風』はシンガポールに発売所（友聯書局）を持ち、少なくとも70年代まではシンガポールで意見交換の場を設けたり、投稿を多く受けたりと接点があった。

アジアの国々の作家が、隣国の文学より遠い欧米の文学に親しいのはどこの国でもあることだ。しかし『蕉風』の内容には現地華人作家の作品の他、東南アジア文学、南アジア文学など西欧文学以外も含まれている。

特に本国で発表の場を持たなかったインドネシア華語系華人作家の場合、早くから『蕉風』は香港と並んで作品発表の場として重要だった。たとえばジャカルタ在住の詩人、柔密欧・鄭[8]は訪問記事[9]が載る

6）「創刊30周年記念専輯」再録より。384期、1985. 5-6

7）黄傲雲『中国作家与南洋』pp. 28

8）本名、鄭遠安。スマトラ生れ。30年代末にシンガポールで在学中、郁達夫編集の『星洲日報』副刊「晨星」などで作品を発表。台湾の洛夫に倣って現代詩を作り始める。香港、マレーシアの雑誌を中心に華語による創作を続ける。1995年没。

9）「訪柔密欧・鄭」416期、1988. 7

ほどの常連であった。また華語作品ばかりでなくインドネシア語文学作品の翻訳紹介も見られる[10]。

現地華語作品の中で『蕉風』掲載後の評判が高かったのは鞠薬如の「猫恋」[11]だろう。この作品は全く無関係のエピソードが連なって出来上がっている。こうした方法的実験が馬華作家自身の手で行われることは極めて稀で、1月に発表された後4月の「蕉風作者交流会」で話題となり、7月の428期には「猫恋」評論が6本並んでいる。更に異例のことだが428期には「猫恋」本文が別刷りで付されている。鞠薬如はその後同形態だが見かけ上筋の通った中篇小説「時すでに晩し」を435期(1990.3-4)に発表している。

投稿の常連の中で別格は、前述の陳瑞獻である。『蕉風』の編者も務め陳を『蕉風』側も出藍の誉れと感じるらしく、73年の牧羚奴[12]作品特集号、1980年の全頁陳瑞獻作品の陳瑞獻集珍荘[13]個展特集号、1990年の陳瑞獻特集(442期、1990.5-6)と3回の特集を組んでいる。

馬華文壇は自前の評論家を持たず、作品評論は時折大陸の大学教員が物珍しげに取り上げるくらいだった。そんな中、王潤華以来待望の文芸評論家として登場したのが謝川成(元マラヤ大言語学部教員)である。謝は1981年の第三回文学理論賞[14]受賞者で、受賞作の「宋子衡、菊凡にみる馬華現代短篇小説の題材と表現略述」は同年5月の338期で紹介された。当時マラヤ大学英文科の学生だった謝の評論では、従来外国文学、中国近代文学評論でしかなかった世辞ぬきの批評が緻密に行われている。

文芸副刊との差別化主張にも現れた長篇小説の掲載だが、前述の「猫恋」のような例外を除き、スペース的には可能でもプロ作家のいない馬華文壇では長篇小説はほとんど書かれることはなかった。中で鍾瑜の『紅塵』は52万1千字の大長篇で、1983年から2年がかりで連載を終えている。鍾瑜は現在シンガポール在住で1940年生まれ。幼少時大陸の私塾で教育を受け、新中国成立前夜にマレーシアに戻る。その後シンガポールに渡るも小学5年で退学。以後正式の華語教育は受けていない[15]。『紅塵』の他、『茫茫夜』『銀婚記』などの長篇があり、精力的な執筆ぶりは前述の黄崖や90年代以降の流軍に匹敵する。

80年代末には5回に渡り馬華作家の個人特集が組まれており、取り上げられた作家は以下の通りである。

①雨川特集(420期、1988.11)
②洪泉特集(423期、1989.2)
③方昂特集(426期、1989.5)
④李宗舜特集(431期、1989.10)
⑤艾文特集(433期、1989.12)

雨川、艾文は北マレーシアの小説家と詩人で、洪泉は30代で陶芸家でもある小説家。方昂は詩人で後述の第一人者方北方の子息、李宗舜は6年ぶりに筆を執った詩人である。その後別格で方北方の特集[16]が組まれている。邦訳作品もある方北方は1936年から半世紀に渡って書き続け、30冊以上の小説、散文論文集などを出版し、1989年にはマレー人マレー語作品限定の国家文学賞対抗のマレーシア華文文学賞の第一回受賞者となっている。この作家に対して蕉風編集部は、客として迎えるのでなく“われらが方北方”と温かくもてなしているように見える。

マレーシア華語系華人文学には前述のマレーシア華文作家協会等の文芸団体の他、各地に小グループ――文風社、金石詩社、天蠍星文友社、天狼星詩社、星座詩社、大馬青年社[17]など――があり、独自に活動しているが、『蕉風』は彼らにも作品発表の場を提供している。

一方、マレー語文学を華語訳で紹介したいわゆる華馬文学は、「マレー文学作品選訳」や陳鴻洲の「マレー文学講座」など、70年代まではよく見られたが90年代以降は目に付かない。

中国大陸の同時代文学作品については莫言と王安憶のマレーシア訪問(1991. 6)[18]で一時的に盛り上がっている。

欧米文学を中心とした20世紀文学の紹介は売り物のひとつで、マルロー(287期、1977. 1)やロレンス(321期、1979.12)、サルトル(328期、1980.7)アーサー・ミラー(336期、1981.3)、マラマッド(350-351期、1982.6、7)、シモン(390期、1985.12)など特集された作家も数多い。また国際的な認知の基準という面

10)インドネシア現代文学翻訳紹介特集号、311期、1979.1
11)422期、1989.1
12)陳瑞獻の筆名のひとつ。
13)Art House Gallery(姚拓経営)
14)マレーシア華人文化協会主催。
15)「鍾瑜訪問」『蕉風』383期、1985.4
16)『蕉風』452期、1993.1-2
17)台湾でマレーシアからの留学生を中心に結成されたグループ。
18)インタビュー記事は443期、1991.7-8掲載。

からノーベル賞に相当の関心を払っており[19]、受賞者決定後11月号か12月号にはその年の受賞作家の作品とプロフィールが紹介される。中でもラテンアメリカのスペイン語文学への国際的評価は、地域と言語源流に食い違いのあるポストコロニアル文学の世界文学での評価、たとえばラテンアメリカ～スペイン語文学、マレーシア～中国語文学という共通点から馬華作家を鼓舞し、1986年にはラテンアメリカ文学が特集されている[20]。同様に移民文学への関心も高く、関連するものに「現代ソ連移民詩人特集」[21]がある。

海外文学の中で特に注目したいのは台湾文学の紹介である。華人作家が華語同時代文学の前衛を知ろうとすれば、まず母語の文献を探すのが自然だが、中国語訳となると台湾、香港出版のものに頼ることになる。文革後の中国新時期文学において台湾現代派文学へ関心が払われたことに先んじて、マラヤの華人作家の一部は台湾文学の成果を高く評価していた。あくまで一方通行であったこの間の事情を、『シンガポール共和国華文文学選集』[22]を編集した台湾作家柏楊は次のように述べている。

> シンガポール、マレーシアとの文化交流はすべて中国語を媒介としております。更にこれらの国は台湾文壇を大変良く理解しています。ところがわれわれはそれらの国の文壇について少しも理解せず、大変不公平です。これは台湾にとって損失であるとも言えます。なぜならシンガポールやマレーシアの文壇は成果をあげているからです。少なくともある作家達の作品はとてもレベルが高いと思います。また一方でシンガポール、マレーシアの文学史を編纂することは文化交流を進めることにもなります[23]。

1920年代の李欧梵言うところの「上海モダン」は確かにモダニズムだったが、大陸ではその後萌芽に留まり断絶した。冷戦後の台湾におけるモダニズムは担い手の欧米留学経験などからも、西側直系と言える。たとえば小説におけるモダニズム手法を代表とする「意識の流れ」が、中国語では前述劉以鬯によって60年代に初めて使用されたが、大陸では改革開放後の新時期文学で王蒙によってようやく採用されたことを一例として挙げておこう。こうした台湾などから伝わった現代派文学に対して、馬華文学の本流は中国経由の現実主義文学であると言われる。しかし80年代時点でも現代派は数十年の文学的営為を積み重ねていた。彼らの文芸作品についても散逸を防ぐための資料収集が急務であろう。元マラヤ大学中国研究学部の故陳応徳は『蕉風』誌上で『馬華新文学大系－1960～1990』の編集を提唱していた[24]。確かに方修編の『馬華新文学大系』が1919年から1956年まで（詩集は1971年まで）、苗秀ら編の『新馬華文文学大系』は1945年から1965年までで、他にも1980年代までの作品を網羅したアンソロジーはあるが、それらはいずれも現実主義作家の作品が中心で、特に1960年代以降の現代派作品が抜け落ちている。

一方、『蕉風』の編集者の姚拓は馬華文学の文芸理論を現実主義、社会主義リアリズム、芸術至上主義、現代派の４つに分け、現代派の説明として以下のように述べている。

> （前略）4つ目は現代詩を書く青年作家達で、現代派と呼ばれる。現代詩が最初に現れたのは1959年『学生周刊』誌上である。その後にだんだん多くなり、現在『蕉風』は現代派の牙城と言われている。実際には『蕉風』の作品のうち全部が全部現代派の作品という訳でない。しかし『蕉風』が現代派の作品を最も多く掲載している雑誌であるということも、また事実である[25]。

馬華文学の伝統である現実主義文学の呪縛から逃れるために、馬華文学は台湾から現代派文学を受容した。そして台湾文学が60年代にモダニズム受容をしたことを、大陸文学にないひとつの達成として受け止めている。このように、台湾文学がアジアを中心に中国語文学を理論的に先導した時期があることは間違いないだろう。

19）舛谷鋭「マレーシア華語華人文学の過去と未来」海燕、1992.10、p.202-203
20）ラテンアメリカ文学特集号、391期、1986.5
21）410期、1987.12
22）『新加坡共和国華文文学選集』台北：時報文化出版、1982
23）350期、1982.6
24）445期、1991.11-12
25）394期、1986.8

しかし現代派作家は現実主義作家から留学帰りの若僧、すなわち人真似と見られがちである。確かに台湾留学経験者と現代派作家は重なっている。とはいえ、現実主義作家にも年齢的な成熟の時期が訪れており、その後の台湾馬華文学の進展や彼らをマレーシアの華語系華人らが「文化英雄」視していることは、2010年代「サイノフォン」時代の前史と言えよう。

モダニズム詩人で第一世代作家方北方の子息、方昂は「中年作家」[26]という文章の中で、40歳以上の中年作家が振るわない原因として、一. 才能に限界を感じる、二. 多くの青年向けのコンクールや文学賞に参加資格がなくなる、三. 創作に興味や達成感を失う、四. 生活、特に経済的に圧迫される、の四つを挙げている。これらは現実主義作家にも共通する傾向だが、『蕉風』は彼らに対して誌面を通じて執筆を呼びかけ、作品を評価することで創作継続を後押ししようとしている。

なお、中国、台湾、マラヤという三角関係で見た場合、1930-40年代の中国文学との関係を断ち切られた戦後台湾文学や、台湾作家の中国語による文学的実験を目にしなかった中国大陸文学に対して、実は馬華文学は非常に有利な立場にあった時期があるという事実は見逃せない。大陸で改革開放始まらんとする年に、以下のようなエッセイが掲載されている。

> こうして見ると、シンガポール、マレーシア、香港の華語作家は何と幸運なことだろう！　中国文学のすべての伝統が、詩経から五四文学に至るまで彼らに対しては中断していない。しかし台湾作家について見るとまさに中断している。先輩の五四作家が何を書いたのか、何を試したのか、また西洋文芸思潮として何を紹介したのかも知らない。台湾の作家にとって中国文学は清朝までで終わりで、五四口語新文学は無かったことになっている[27]。

内容に次いで、『蕉風』を巡る人的リソースについてだが、姚拓の「蕉風は文芸誌であり、文芸学校でもある」[28]という言葉通り、『蕉風』は誌面を通じて数多くの作家を育ててきたが、編集に携わるのも専門編集者でなく若手の作家達で、特に70年代以降ここから育つ書き手、文芸副刊編集者は数多い。

そんな中で現在でも“蕉風の保母”[29]として編集の地位にあり、経済的な支柱でもあるのが他ならぬ姚拓である。

姚拓は1922年河南省の生まれで、1950年に香港に移り『中国学生週報』の編集に携わった。その後1957年にシンガポールで学生週報社が設立され、この『学生週報』(後の『学報半月刊』)編集のためにシンガポールへ渡ってきたという。1985年の『蕉風』30周年記念特別号で、経済面も含めて以下のように述懐している。

> 隠しだてすることはないと思うが、蕉風には毎月必ず欠損があり、こうした赤字は一切クアラルンプールの友聯文化事業有限公司の負担になっており、月に凡そ二千から二千五百リンギに上る。『蕉風』を印刷しているマラヤ印務公司も友聯文化有限公司の関連会社の一つで、『蕉風』はタイプ、組版、印刷という基本的な問題をクリヤできたからこそ、厳しい中でも今日を迎えることができた。マラヤ印務公司の『蕉風』に対する貢献は大である。もちろん友聯文化事業公司の助けがなければ『蕉風』はとっくに停刊になっていたろう。ある理事が冗談めかしに言った。「月二千五百で三十年ならビルが建つじゃないか」。
>
> 『蕉風』創刊三十周年記念号誌上を借りて、私はもう一度皆さんに説明しようと思う。　毎月二千五百リンギのマイナスがあって、三十年もの長きに渡り文芸誌を続けられるのだろうか？
>
> 私は思う。雑誌の出版経費を維持することは非常に重要である。が、更に重要なのは、「誰」が手を煩わせつつ、怨みを買いつつ文芸誌を編集し続けるかだ。
>
> 『蕉風』が1955年11月に創刊されて以来、歴代の編集、主編が全ての義務を負ってきた。こうした伝統は今日に至るまで変っていない。このようなたわけた編者たちが一代また一代と引き継いでこなかったなら、『蕉風』が今日まで出版されていることは決してなかったろう。
>
> 『蕉風』にいったいどれだけの編集者が関わってきたかは、三十年後の今日では私にもはっきりし

26)447期、1992.3-4

27)賴山舫「五四作家」303期、1978.5

28)1991.2.28談

29)鄭百年『中央之国』蕉風出版社、1985。自序

ない。創刊した頃私は香港にいてまだ南来していなかった。当時主編は方天で編集委員には申青、馬摩西、范経、李如霖、陳振亜（白蒂）がいた。私は1957年2月にシンガポールに着き、編集に加わった。1959年、マラヤ印務公司がクアラルンプールにでき、学生周報と蕉風はクアラルンプールに移って出版されることになった。この頃方天がカナダに移民し、シンガポールの編集委員がいなくなったので主編は彭子敦に代わり、続いて黄思騁、黄崖が主編を勤め、大体1970年から後は編集に加わる者も多くなった。白垚、周喚、谷川、肖凌、牧羚奴、張錦忠、周清嘯、紫一思や現在の梅淑貞らである。『学生周報』（後の『学報』）と『蕉風』はずっと姉妹雑誌だったので、『学報』の編集を担当すれば必ず蕉風の編集委員になった[30]。

一方、姚拓と共に香港から南来し、ネームバリューを活かして香港にも販路を拓いた黄崖は、姚拓より10歳年下の1932年生まれである。やはり香港の『中国学生週報』編集を経て1959年クアラルンプールに来て華字紙の文芸副刊の編集を担当し、『蕉風』の方は1959年から10年ほど編集に携わっている。

こうした中国生まれの移民第一世代の編集者の他、80年代になると現地生まれで『蕉風』を読んで育った梅淑貞、張錦忠、王祖安、許友彬らが編集に加わっている。特に1987年から2年間主編を勤めた王祖安は、その後『星洲日報』の文芸副刊「文芸春秋」編集部に移っている。また444期（1991. 9-10）において現地の高等教育機関であるマラヤ大卒の小黒が夫人の朶拉と編集に加わっている。更にこの号から編集顧問（複数）－編集執行（1名）体制が編集顧問（複数）－編集執行（複数）になり、姚拓は前者から後者に名を移している。

小黒は編集に加わった444期の巻頭でマレー文芸誌を引き合いに出し、次のように述べている。

良い雑誌は必ず優れた作家の達の強力な支持があり、素晴しい秀作を提供してくれる。これが大変重要なポイントである。（中略）刊行物について言えば、マレー文学雑誌『文学月刊』（Dewan Satera）に最も興味を覚えます。この雑誌はマレー文壇の代表誌で、Shanon Ahmad、A.Samad Said、Usman Awangら著名作家が大作を発表する他、Dinsmanのような若い前衛作家から大学で教鞭を執る学者（たとえば最近国家文学賞を受賞したHj Muhammad b.Salleh教授）も強く支持しており、しばしば雑誌に文学問題の探究稿を載せます。ここからマレー文学の盛んさが感じられ、瞠目させられます。ここ数年、華字新聞の文芸版は増えたものの良田も耕す者なしといった体です。国内のいくつかの文芸誌も道の両側の良田をほうり放しのままです。これはまともな状況ではありません。『文学月刊』を読んでいると羨望の他、境界に立たされた者は深く考えます。時代は経済発展に向かい、社会も急変しているのに、馬華作家は更に自己強化を図るべきでないのか？更に真剣に、更に積極的に文学事業を発展させていくべきではないのか？[31]

この期以降「東南アジアのマレーシアの中の華人」といった視点の記事が増えており、上記のDewan Bahasa Dan Pustaka（DBP：国立言語・書籍局）の文学賞の推移と歴代受賞者の紹介[32]やタイ国が設けている東南アジア作家賞を受賞したマレー人作家の紹介[33]などもある。

こうして、奇跡的に50年近く刊行され続けていた『蕉風』だが、1999年２月、488号で停刊するに至った。アジア通貨危機に伴うマレーシア経済低迷の中でも、装丁を変えたり、中学生向けの『少年蕉風』を添付したりと健在振りを示していたが、蕉風出版基金会の設立も空しく休刊に及んだ。創刊当初から毎号赤字を出し続けていた公称2,000部の文芸誌が生きながらえたのは、実業家としても成功した姚拓を中心とする華人作家らの無償の庇護によるものだったが、それも積み重なる欠損には耐えかねたようだ。

しかし華人社会は『蕉風』を、馬華文学を見捨てなかった。シンガポール対岸ジョホールバルの、華人系私立カレッジである南方学院内に設置された「馬華文学館」を中心に、2002年末に『蕉風』の再発行が果

30）姚拓「老いてなお盛ん、壮心は止まず」384期、1985. 5-6

31）「編集記」444期、1991. 9-10

32）碧澄「Muhammad Haji Salleh　第六回国家文学賞受賞者」444期、1991. 9-10

33）碧澄「第13回東南アジア作家賞受賞者、Jihaty Abadi」448期、1992. 5-6

たされた。初代主編はシンガポール在住の許維賢で、地の利を生かしシンガポール、台湾など、執筆陣と販路を拡大している[34)]。

イデオロギー対立のなかの馬華文学

20世紀以来の馬華文学の歴史の中から、華字紙副刊と華語文芸誌という逐次刊行物を取り上げ、華語系華人文学について見てきた。一方書籍について言えば、冒頭で述べたように、海外華文書籍が自費あるいは助成金出版が多いのは文学に限らない。出版社版も増刷されることはほとんどなく、最初の刷部数も千部未満で、時代を遡っての収集は非常に困難である。書店で買うというより、むしろ直接個人からもらいうけるという形態が収集の決め手となる。こうした海外華文書籍のありかたは、タイの葬式本に酷似している。実際、葬儀の引き出物として死後に配付されるか、名刺代わりに生前に配付されるかという違いしかないような、自伝的な内容の書籍も少なくない。

しかし、書籍の中にも文中で触れた方修『馬華新文学大系』や苗秀等編『新馬華文文学大系』、趙戎『新馬華文文芸詞典』のように、その出版が馬華文学の存在を下支えしている書籍もある。こうして創出された冷戦期の馬華文学史の社会主義リアリズムの流れを汲む「現実主義文学」と、台湾経由で世界文学の実験手法を取り入れた「現代派文学」の対立の実態を、マレーシア華人が旅台、留台（台湾留学）知識人らを含め反共の砦台湾から垣間見た大陸の共産主義との対立という、冷戦期特有の構図に留まらず解明して行くことが今後の課題であるが、今世紀からのサイノフォン時代を迎え、20世紀初頭「五四」新文学以降の華僑華人アイデンティティに着目した整理と接続が非常に難しくなっていることを指摘しておく。

34) 馬華文学館――蕉風復刊〈https://www.southern.edu.my/mclc/jiaofeng.php〉

引用・参照文献

邦文

今冨正巳（1981）「シンガポール華人の言語生活についての調査」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』16。

――――（1982）「マレーシア華人の言語と華文文学の調査報告」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』17。

――――（1983）「国際華文文芸営ノート」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』18。

――――（1985）「マレーシア華文文学の高潮と低潮」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』20。

――――（1986）「馬華文学在坑戦初期的一些問題」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』21。

――――（1987）「馬華文学の独自性をめぐる論争」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』22。

――――（1988）「馬華文学史を通して観察される華人社会の意識形態の変容」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』23。

――――（1990）「東南アジア華人の思想意識の変容」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』25。

王潤華／今冨正巳訳（1985）「シンガポール華文新詩の起源および発展の方向」『アジアアフリカ文化研究所研究年報』20。

小木裕文（1976）「「馬華新文学簡説」翻訳並びに研究」『中京大学教養論叢』17－1。

――――（1976）「馬華作家小伝」『中京大学教養論叢』17～18。

――――（1980）「馬華文学と中国作家」『中国語』7月号。

――――（1980）「馬華文学の最近の傾向」『中国文芸研究会会報』30。

桜井明治（1975）「馬華文学の伝統と現代」『朝日アジアレビュー』23。

――――（1976）「文学にみるシンガポール華僑社会層」『朝日アジアレビュー』25。

――――（1976）「マレーシア・シンガポールの英語文学と社会」『朝日アジアレビュー』28。

――――（1977）「マレーシアにみる言語紛争」『朝日アジアレビュー』31。

――――（1979）「馬華文学と中国文学」『私学研修』85。

――――（1982）「馬華文学の中国からの自立をめぐって」『愛知学院大学論叢一般教育研究』29－3。

鈴木正夫（1976-77）「馬華文学と中国および中国文学」『野草』18-19。

高沢裕之（1975）「マレーシアの言語事情と文芸活動」『朝日アジアレビュー』22。

田中恭子（2002）『国家と移民――東南アジア華人世界の変容』名古屋大学出版会。

太田 勇／大坪 省三／前田 尚美 編（1987）『東南アジアの地域社会』東洋大学創立100周年記念論文集［1］。

方修／田中宏訳（1973）「馬華新文学とその発展過程」『朝日アジアレビュー』14。

方修／原不二夫訳（1975）「華人の精神革命」『アジア』12月号。

今冨正巳先生古希記念論文集刊行会編（1992）『馬華文学とその周辺』三冬社。

舛谷鋭（2004）「六十年代マラヤ華人社会における文学史創出期について」『白山人類学』7。

山本哲也（1976）「マレーシア現代華語文学について」『北九州大学外国語学部紀要』28～29。

華文・英文

Wong Meng Voon and Wong Yoon Wah eds. (1983) *An Anthology of Singapore Chinese Literature*, Singapore Association of Writers.

柏楊（1982）『新加坡共和国華文文学選集』台北：時報文化出版.

Wong Yoon Wah, et al. (1989) *Chinese Literature in Southeast Asia*, Goethe-Institut Singapore & Singapore Association of Writers.

周維介（1988）『新馬華文文学散論』香港：三聯書店.

舛谷鋭（2004）「論六十年代馬華文学史的“創出”期」『馬来西亜華人社会百年国際学術検討会論集』.

新加坡文芸研究会（1990）『独立25年新華文学紀念集』.

方北方（1987）『馬華文学及其他』香港：三聯書店.

方修編（1970-83、2000-01）『馬華新文学大系』16巻、Singapore: 世界書局.

方修（1975-1976）『馬華新文学史稿（修訂本）』上下 シンガポール：世界書局.

――――（1976）『馬華文学的現実主義伝統』シンガポール：洪炉文化企業公司.

FANG XIU（方修）/生田滋訳（1977）*NOTES ON THE HISTORY OF MALAYAN CHINESE NEW LITERATURE 1920-1942 TOKYO: THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTURAL STUDIES*, 東アジア文化センター.

方修（1986）『新馬文学史論集』香港：三聯書店.

――――（1987）『戦後馬華文学史初稿』クアラルンプール：董総.

――――（1989）『馬華新文学簡史』クアラルンプール：董総.

黄傲雲（1987）『中国作家与南洋』香港：科華図書出版公司.

馬崙（1984）『新馬華文作家群像』シンガポール：風雲出版社.

苗秀（1967）『馬華文学史話』シンガポール：青年書局.

苗秀等編（1972）『新馬華文文学大系』8巻、シンガポール：教育出版社.

王慷鼎（1987）『新加坡華文報刊史論集』シンガポール：新加坡新社.

伍良之（1988）『馬華新文学発展簡史』亜華.

呉天才（1975）『馬華文芸作品分類目録』クアラルンプール：マラヤ大学中文系.

楊松年（1982）『新馬華文文学論集』シンガポール：南洋商報.

――――（1986）『戦前新馬報章文芸副刊析論』シンガポール：新加坡同安会館.

――――（1988）『新馬早期作家研究』香港：三聯書店.

――――（1990）『南洋商報副刊獅声研究』新加坡同安会館.

原甸（1981）『香港・星馬・文芸』シンガポール：万里書局.

――――（1987）『馬華新詩史初稿』香港：三聯書店.

趙戎（1967）『論馬華作家与作品』シンガポール：青年書局.

――――（1979）『新馬華文文芸詞典』シンガポール：教育出版社.